

ハワイのプランテーションで作られた接触方言 —オーラルヒストリー資料に見られるコイナー日本語—

朝日祥之, ダニエル・ロング

1. はじめに

本稿では、19世紀後半以降ハワイで形成されたプランテーション社会に居住する日系人が持ち込んだ日本語諸方言間の接触によって形成されたハワイの日本語方言（以下、ハワイ方言と称する）に見られる言語的特徴を考察する。その考察には、ハワイ大学オーラルヒストリーセンター、ならびにビショップミュージアムによるオーラルヒストリープロジェクトで、ハワイ日系人一世を対象として収集された音声・映像資料を用いる。

本稿の目的は、言うまでもなくこの接触方言としての特徴記述にある。だが同時に、オーラルヒストリー研究で収集された音声・映像資料が言語学的分析に用いることが可能であることを主張するのがもう一つの目的である。

2. ハワイ方言に関する先行研究

本稿で取り上げるハワイ方言研究は、決して新しいものではない。その存在を指摘した論考は少なくとも1960年代にさかのぼる（安部1965）。1970年代になると、ハワイ方言研究が本格化する（井上1971；比嘉1974）。研究が本格化し、その存在が認知された意義は大きいものの、その形成メカニズムに踏み込んだ論考は少ない。

それ以降、言語接触理論が発展し、当時の研究者にはなかった様々な新しい知識や概念、方法論や理論、分析手法が応用可能となった。例えば、小野米一による北海道における方言接触とそれによる新しい言語変種の成立過程に関する研究（小野1978, 2001）や、Jeff Siegelが行ったフィジーにおけるヒンディ語諸方言の接触とその後のkoinéization（コイナー化）の研究（Siegel1988）などである。

そのような状況下で、筆者が継続的に行なっている近畿地方のニュータウン（朝日2008）やサハリン（朝日2010, 2006）、小笠原諸島欧米系島民（ロング近刊, Long2007）や石垣島台湾系島民の言語調査（ロング他2010）からも新しい事実と新たな問題点が指摘されている。またハワイ方言自体も近年、研究テーマとして設定されるようになってきている（酒井2004；Hiramoto2010など）。そこで本稿では、

新たに収集された工具箱でハワイ方言の再分析を試みる。

3. ハワイ日系・沖縄系話者のオーラルヒストリー資料

分析に入る前に、本稿で取り上げる音声・映像資料の概要を述べる。本稿で扱う資料は、

(1) Uchinanchu: A History of Okinawans in Hawaii□i

(2) Japanese DVD Collection at Bishop Museum

の二つである。いずれもハワイ日系人を対象としたものである。それぞれの資料には、彼らのハワイでの生活や日本人会の発足、ファミリーヒストリーが収録されている。データ収集は、(1)は1980年、(2)は1970年代後半から1980年代初めにかけて実施された。1890年代から1900年代生まれの日系人がその対象となり、日本語(または英語)を媒介語とした面接調査法が採用された。(1)は、ハワイ大学オーラルヒストリーセンターに所蔵されている。このプロジェクトリーダーである Warren Nishimoto 氏, Michi Kodama-Nishimoto 氏の了解を得て、音声資料の利用許諾を得た。なお、この資料のトランスクリプトが作成され、ハワイ大学付属図書館で閲覧可能である。

(2)は、現在ハワイ日本文化センターに所蔵されている。この資料のトランスクリプトは存在しない。同センターディレクター Brian Niiya 氏の了解を得て、この映像資料の利用許諾を得ている。

このようなオーラルヒストリー資料は、話者を取り巻く社会言語学的状況に関する情報を収集する性格を有するものである。この利点を活かし、この資料を言語資料化し、言語学的分析を施すことは可能である。同じような問題意識でなされた研究事例としてニュージーランド英語研究がある (Gordon 2008, Gordon, et al. 2004)。本研究課題もオーラルヒストリー音声資料の言語研究の一つとして位置づけられる。

4. ハワイ方言話者の言語意識に基づく作業仮説

これまでの研究で、ハワイ方言には、広島をはじめとする中国地方の方言的影響を強く受けたとされる。筆者もそうした印象を受けた。

さて、ハワイで沖縄系移民がハワイの共通言語となった広島方言の習得に励んだというのは、一般的なもののようである (Joyce Chinen, P.C. 2010年6月25日)。沖縄系3世の Wesley Ueunten (2008)にも、沖縄出身の祖母がハワイに来てから広

島方言を意識的に身につけようとした話が紹介されている。しかしながら、沖縄系移民が広島方言を覚えた段階で第1言語である沖縄諸方言からの影響（言語干渉、転移）を受けた可能性は十分に考えられる。

本稿では、一人の沖縄系移民（一世）のハワイ方言に見られる特徴を分析する。先に見たハワイ方言話者の言語意識から次のような作業仮説を立てることにした。なおこの作業仮説は、今後データ分析を行いながら検証を行い、必要に応じて修正する予定である。

【作業仮説】

1. ハワイには沖縄諸方言の話者と中国地方諸方言の話者がプランテーションで混住した結果、その両方の特徴を併せ持った「コイナー」であるハワイ方言の日本語が誕生した。
2. ハワイ方言は当然個人レベルで観察される。沖縄系話者はより沖縄的な特徴が、広島系話者はより広島方言的な特徴が多く使用されるものの、個人差や集団差を越えた共通性がある。
3. 「コイナー」は「同一言語内の複数の方言が接触することによって生まれる新しい方言」を指す。本稿では、琉球語沖縄本島南部方言と広島方言との接触現象を取り上げるが、沖縄本島南部方言以外の言語体系（山原、宮古、八重山など）、広島方言以外の本土方言との接触も研究の範囲とする。なお、この接触にかかる方言は、相互理解が成立しない点で異なる「言語間」の接触と位置付けるかもしれない。だが、同系の姉妹言語であるゆえ、この「言語間」の差異は、ピジン・クレオールが発生するほど大きなものでもない。実際、この事実はウチナーヤマトウグチの実態にも確認できる。したがって本研究ではこれらを方言接触とみなす。

5. 方言的特徴

本節では、3節に示した資料に見られる方言的特徴を見る。ここでは、(2) Japanese DVD collection at Bishop Museum にある一人の沖縄系移民 (Mr. Hashiji Kakazu・1890年生・男性) を取り上げる。漢字名はないが、おそらく苗字は「嘉数」であろう。この話者は、沖縄に生まれ、16歳の時に一人でハワイへ移民した（詳細はトランスクリプトを参照）。撮影がなされた年月日は不詳だが、話者は87歳だと述べているので1978年ごろであると推測される。撮影は白黒なので、ビデオテープではなく、フィルムであったと思われる。筆者が入手しているイン

タビューの長さは1時間2分13秒だが、話の途中で切れているので、後半部分が存在するかもしれない。

聞き手（インタビュアー）から日本語で質問を受けてそれに答える形でインタビューが進められる。聞き手は60歳代と思われる男性だが、日本から来た人なのか、ハワイ在住の日系人なのかは定かではない。しかし、（1）当時のオーラルヒストリー採集に日本側の人が関わっていたという話（記録、記憶）がないこと、（2）聞き手も話し手に近い日本語を使ったり、英語交じりの話し方にしたりしていることの2点から考えれば、聞き手もハワイ日系コミュニティの一員である可能性が高い。

ここで少し文字化データを見よう。括弧の中は聞き手による質問、相槌などである。内容や語彙的、文法的特徴を把握しやすくために漢字仮名交じり文にしたが、特筆すべき音声学・音韻論的特徴が現れている箇所にはルビを振った。また、筆者のコメントを[]に入れた。聞き手の発音は不明瞭なところが多いが、嘉数氏は非常に明瞭で聞き取りやすい口調で話している理想的なインフォーマントである。だが、聞き取りづらい箇所や聞き取りに自信がない箇所については[??]と記した。

表1 Mr. Hashiji Kakazu のデータ（抜粋）

（嘉数さん、あんた原籍はどこですか？）原籍は、沖縄県、島尻郡、高嶺村^{たかの}、^{あづま}真栄里というところで。

（生まれたのは？いつでしたか）明治23年11月7日です。（じゃあ、eighteen ninety ですね。）ええ。eighteen ninety。

（今年何歳になられるんですか）もう^{はちじゅうしち}87歳。

（日本へ帰ったことありますか？）Nineteen sixteen に行きました。

（ハワイへ来てどう思いますか？良かった思いますか？）それ良かった思います。結婚したのは大正元年^{たいせうぐわんねん}ですの一。あの一、明治天皇が亡くなられたとき、わたしの wife は日本から来まして。わしが向かいに行っておるときに明治天皇がなくなった。

家族は、娘が一人と息子が一人を、ここで^{つく}作って、沖縄のじいさん、ばあさんが寂しいから思うて、沖縄に行かしました(Misses はね)いええ。Misses と二人の子供連れて。ところが、その、行って一ヶ月ぐらいして息子さんの方が亡くなってそれから一年ぐらいしたら wife が亡くなって。それで娘が一人残った。これを

またハワイで呼び返して。今に至っておるんです。(オー?¹)

今孫は男一が人、娘が二人できましたが、この息子の方がここで今 wife をもろうて、また又孫が一人おりますが。へで、アメリカ行っておる、ふたつ、二人目のあの一孫娘は、まだ、お一、一人は二人ボーイができておるが、一人がまだできません。

私はこの小さいときからの一、よほどの卑怯者での一、喧嘩がきらい[? ?]。へで、日本で兵隊になるのが恐ろしかったですよ。ええ。ほいでもう、ハワイにはまあ逃げて来たと言った方がいいんでしょう?

(しかし、あんたハワイ逃げて来るというのはですね、お母さんがよく許したやね。)

わしには「母想うて」という唄があるんですよ。それで聞こえがあったら、みんなに聞いてもらい気もします。今歌っても良いでしょうか?(良い、良い) オーライ。まあ、三味線しみせん持っておらんで、なんだか、だが、三味線しみせんなくても今くわちくわち歌いますから。²

[歌い終えたところ] (三味線しみせんなくて残念だったね) いやー、三味線しみせんあったんで良かったんだけんの一。わし三味線しみせん好きでの一。(そんな母想いのあんたどうしてハワイへ来た?) の一、どうして、おやじがハワイ行くから、自分も付ついて行きとうて仕方がないの。だが、その母はもう行かすまい思うてからに、止めよったけん、「あんたがなにが分かるか?」って喧嘩腰になって。兵隊が恐ろしいからの一。わたしはもう、あと三四年さんよんしたらで兵隊捕られるじゃないかって言つて。お母さんに喧嘩腰になって、来た。[外山氏の話、中略] まあ、ハワイ来る言うたから、わしも行きたい言うたからに付ついて来たんです。その時、母が行かすまい思うてからに、止めた。それで喧嘩腰になって、母に止められなんで、来たんですよ。(学校の方は?) 学校の方は尋常科くわじょうを卒業して高等総合科にの一、出かけておったけど、だいたいできが悪いもんだけんの一、それに、あの一、よく友達喧嘩しての一、それがうるさいからもう、学校には行かんと、おやじの百姓ひくしやう[? ?] をしておったんです。

お母さん、あまり行かしたくなかったんだが、こっちがあまり行きたく仕方ないもんだから、とうとう行かしたの。だが、やはり母想うたらいつも、あの一、

¹ 「オー」はここで驚きの反応として使われている。

² 『沖縄語辞典』による腹立たしいことを表わす「くわちくわち」という単語が沖縄にあるが、ここで言っている「くわちくわち」との関係が不明。今のところ、中国地方にカチカチなどこれに相当する方言語彙が見つかっていない。

もしわたしが自分の子供がわしがやったようなことをして、逃げて行くゆうなら、わしはどういう気持ちするだろうかって、今自分の孫のこと想うとの一、まあ、わしが今孫可愛がるように沖繩のじいさん、ばあさんも、おかあさんも可愛がったん違いないが、それを、その、振り切って来たんだから。思うと気の毒³でしたよ。

(あんたはハワイに来てどこへ行きましたか。) マウイ島⁴の Punene 行きました。(ああ、Punene ね) イエエ。(一番大きな耕地やね?) イエエ。(その当時 Punene にはどんなふうでした?) ああ、わたしは子供んときから、もう〇〇ボーイ [??], もう、大人に負けるもんかとゆう [??], 大人と同じ仕事, *kachiken*³ に行ったんですよ。

ほで、ケンナイもの [??], 片手で振り上げることできないで、両手でこう。(両手でキビ切ったわけ。) ほいで、「ボーイ、ボーイ。ボーイ、ボーイ」って、「しまったなー」と思った。「あっち、あっち行け! こっち来い」って、*boy bango*⁴ のところへ連れられて、行った。ボーイ組の方に連れられて行った。「しまったなー」と思ったの。やっぱり時間が長いだけの一。給料は、あの一、大人も下ろせんだったですよ。(それは良かったです) 18 の割りでくれました。

(それでしばらく Punene におったんですか)

Punene には僅かの間で、今度、金本という、うちのところのもんだの一? 一緒に来ておったんだから。それが Kukuhaele に行きたい、この弟と一緒にになりたいゆうて、Kukuhaele 行くゆうただからの一。me らも一緒に Kukuhaele 行ったんです。(その時は契約移民でなくて、自由移民だから) イエエ (耕地変えられたわけね。) イエエ。(それで *aikane*⁵ がハワイ島⁴の Kukuhaele 行きたい、一緒に行ったわけ。) イエエ。イエエ。

(それで船でハワイ島へ行ったわけやね。) イエエ。船でハワイ島へ来ました。

Laupahoe に降りるつもりで来て、ちょうど Laupahoe を通るときの一、天気わるうなって Laupahoe に船が付けられんで、Hilo まで行ったんです。それはこっちが気が付かんの。ほいで、船から下りて Kukuhaele までは馬車賃⁵ 三円だな、三ドルという(うん、*tri dollar* ね) 話を聞いておったんですよ。ところが、Laupahoe

³ *kachiken*: 砂糖黍を刈る仕事。英語の *cut cane* に由来するハワイビジン英語

⁴ *boy bango*: ハワイビジンで *bango* は畑仕事をするとき首からぶら下げる番号札で、番号によって給料が決まる

⁵ *aikane*: 男友達、ハワイ語の *aikāne* に由来

でなく Hilo だもんだからの一、こっちは気が付かんが、遠いところ行っておるでそれの一。(そうそう) 馬車賃を問うたら 10 ドル言うた、Kukuhaele まで。(10 ドル?) うん。(それ大変やね。)'何?' あの一船から下りて・・・Laupahoe に下りる参慮で [??], 船から下りて 3 ドルで Kukuhaele まで行ける聞いたもんだから。それで Hilo へ行って馬車賃を 10 ドル言うもんだから。こっちは new man だから思うてからね, 3 ドルのものを 10 円と言うた。自分が mistake したことには気が付かんでの一。歩き出したんですよ。(その当時, あんた, Hilo からあんた, Kukuhaele まで行くと大変じゃない?)

だから, 三日かかりで歩いたんです。Hilo から Hakalau まであの一, 一日歩いてきて, Hakalau で一晩泊まる。それからまた Ookala まで来て, Ookala で一晩泊まって。(その頃なんですかね。Hakalau にも沖縄県の人がおったでしょう) Hakalau にもおりました。沖縄人がおるところを頼って行ってからに泊めてもらおた。(笑) ところの者が良いですの一。(それで二日泊まって三日目 Kukuhaele 行ったわけ?)

そう, あの一, 三日目にとうとう Kukuhaele に着いたんです。Hakalau とか, Ookala とか, そいて三日目は (Kukuhaele に着いた)。「もう一日歩いたら Kukuhaele まで着きますよ」ゆうてかたに, Ookala で宿をもろうた人が言うてくれたんですよ。(30 マイルあまりなんでね, 三日間要ったわけ。) あのごろは今と違って, 道が悪いせん [??] 泥道で。(あのごろみんなハワイ島谷が多いから, 谷をぐるっと回っちゃ, 行ったわけやね。) そうそう。(Hakalau の大谷や) 今のように道がまっすぐになっておりませんよ。(道が悪かったやね。)

インタビューの最初に, 話し手となる嘉数氏は, 「原籍」を聞かれ, それを説明している。「原籍」という語は, どの国語辞書に載っているもの(「本籍地に変更があった場合の, もとの本籍所在地」小学館(1988))であるが, 専門的な用語としての性格もあるように思われる。日常用語として使われることがこの人の「ハワイ方言」の語彙的特徴とも言えよう。

またその答えに「高嶺村」(現在糸満市)が出てくる。沖縄では「〇〇村」ではなく「〇〇村」と呼ぶのが一般的であり, この高嶺も例外ではない。この呼び方には沖縄以外の言語的影響が見られると言えよう。なお「字」の発音が「アヅァ」[adza]に聞こえる場合もある。

「11月」がジューイチグッツとなっているのは沖縄の影響だろう。また沖縄で

「7日」がナノカではなく、シチニチになることも一般に知られている特徴である。年齢の「87歳」もやはりハチジューナナサイではなく、ハチジューシチサイになっている。話者は年代を（日本語で話すとき）元号で言う。西暦で言うときは英語に切り替えているのである。沖縄に残っている古い発音であるグッが「元年」にも見られる。

拗音の直音化が「大正」や「三味線」（シャミセンという発音も変異的に現れている）にみられるが、これは典型的な「沖縄大和口」の特徴である。「つ」が「ちゅ」になる（作って、着いた）。なお、「付いて来た」など「付く」には「ちゅく」と「つく」の変異がみられる。一方、「フ」の子音は日本本土に一般に見られる[フ]ではなく[f]となっている。これと同様に、「ヒ」の子音は本土でよく用いられる[c]ではなく[h]となっているのである。

沖縄で良く耳にする頭高アクセントは「（明治天皇が）亡くなられた（HLLLLL）や「わたしは」（HLLL）、「こういう〇〇」（HLLL）などにみられる。全国共通語をはじめ本土各地で無声化する母音は嘉数氏の発音で無声化しないことが特徴的である。この発音は「二人」や「作って」、「好き」などの語に顕著である。アクセントが頭高になっていることと関係しているかもしれない。

一方、沖縄系であるこの話者の日本語には、沖縄よりも広島の影響によると思われる特徴が多数含まれている。例えば、「良かった思います」や「ばあさんが寂しいから思うて…」のように、引用形式「と」が脱落する場合が多い。文末詞の「の一」も「結婚したのは大正元年ですの一」や「私はこの小さいときからの一、よほどの卑怯者での一…」のように頻繁に用いられている。これ以外にも興味深い文末詞や応答詞、相槌などがみられる。特に目立つのは「イエ」という応答詞である。これは日本語なのか、それとも英語のくだけた応答詞 yeah の借用なのかは不明である。これ以外に二つの機能がみられる「オー」がある。一つは、「へい？」に当たる驚きの表現（注1参照）で、もう一つは、「はい、うん」といった相槌に相当し、この短いデータでも頻繁に使われている。

また、「へ」や「ヘデ」に聞こえる文頭に現われる接続詞がある。これらは「それで」→「そりで」→「そいで」→「ほいで」→「へで」→「へ」という過程を経たと思われる。

語彙面でも一人称代名詞の「ワシ」が「ワタシ」とともに使われている。なお、沖縄によくみられる「ワ」や「ワン」はほとんど用いられない。

文法面では動詞の「ウ音便」が「もろうて」（もらって）や「おもうて」（思っ

て)などに目立つ。動詞の否定は「ン」で、その過去形は「ナンダ」とも「ンダッタ」ともなる。「ラレル」敬語を頻繁に使っている。アスペクトの進行態(ヨル)と結果態(テオル)を区別していることが「母が…止めよったけん」から分かる。理由を表わす接続詞ケンもこの例から窺い知ることができる。

沖縄で頻繁に使われる「～てからに」という順接表現を使っているが、これは西日本で各地でも使われているので、これからその細かい用法を分析する必要があると思われる。

興味深いことに、アスペクトが「～とる」ではなく一貫して「～ておる」として現れている(本動詞としての存在表現も「いる」ではなく「おる」になっている)。もちろん、この「～ておる」はこの一人の話者が「ていねい」に話そうと使用したものにすぎない可能性もある。ただ、話者自身は「politeに」、「簡略形なしに」、「標準語を意識して」話そうとしたと思われる。つまり、この話者は、日頃「～とる」を使用しているが、それを方言と意識し、彼が「標準語」だと思っている形式に直そうとした結果とも受け止められる。なお、『方言文法全国地図第4集』の第198図、第199図のアスペクト表現分布図には、「～ておる」の回答は(併用を含めて)3地点でしか確認されなかった。しかもまとまった分布(隠岐、佐渡、北海道)を見せていないので、安定した地域言語ではないようである。その意味でも特殊な語形と言える。

コイナーは接触によって新たに形成された新生方言と言えるが、以上の例から分かるように、その「新生」は二つのことを意味する。一つは、使用される言語形式そのものが新しいのではなく、それらの両方の言語形式が同一方言で併用されるという意味において、従来のどこの方言にも見られない言語体系である(表2)。もう一つは、言語形式そのものが新しい、つまり、従来どこの方言にも使われていなかったというものである。Trudgill(1986:101)は前者のタイプをmixed(混合型)、後者をintermediate(中間型)として区別している。嘉数氏が使っている「～ておる」はもし個人語でも誤ったスタイルシフトでもなければここに分類できるかもしれない。

表3の例は、ハワイ方言は従来言われてきたように中国地方方言ではなく、日系・沖縄系移民がプランテーションでの共同生活を送っていたため、より多くの方言が介在して発展した接触方言(コイナー)であったことを示唆していると思われる。

表2 コイネーを新生方言と呼べる二つの理由

	月, 元年の発音	文末詞	アスペクト
方言A (広島)	が ^つ , がんねん	のー	とる
方言B (沖縄)	ぐわ ^つ , ぐわんねん	さー	てる
方言C(コイネー)	ぐわ ^つ , ぐわんねん (沖縄型)	のー (広島型)	ておる (新型)
Trudgill の分類	Mixed (混合型)		Intermediate (中間型)

表3 話者の特徴

語彙 (内容形態素)、個別発音	音韻	文法、機能形態素
「原籍」本籍	「 ^あ 字」	引用の「と」抜き「良かった思います」、「ばあさんが寂しいから思うて」
「村」固有名詞でソンではなくムラと言う	1 1 ^{くわ} 月	「のお」文末詞
「7日」シチニチ	^せ 完 ^{ねん} 元年	「イエ」応答詞
「87歳」ハチジュウシチサイ	^{たい} 大正	「オー」驚きの表現、 「オー」相槌
元号は日本語・西暦は英語	^{さん} 三味線、 ^{しん} 三味線 (変異的)	「へ」、「へデ」接続詞
「ワシ」、「ワタシ」一人称代名詞	^ち 作 ^{って} 、 ^ち 着 ^{いた}	「ウ音便」モローテ、オモローテ (貰って、思っで)
「おる」有情物存在動詞	^ち 付 ^く 、 ^ち 付 ^く (変異的)	「ン」動詞否定
「ボーイ」「少年」だけでなく「息子」の意味	フは[ɸ]でなく[f]	「ナンダ」、「ンダッタ」否定過去形
「wife」家内	ヒは[ç]でなく[h]	「ラレル」敬語
「misses」奥さん、家内	頭高アクセント、例： 「亡くなられた」(HLLLLL) 「わたしは」(HLLL) 「こういう」(HLLL)	「ヨル」進行態「母が・・・止めよったけん」
「オーライ」①「良いよ」という返事、②「それでは」考え込む間投詞	母音が無性化しない「二人」 「 ^ち 作 ^{って} 」、「好き」	「テオル」結果態
「kachiken」黍刈り 「aikane」男友達		「ケン」理由接続詞
「meら」私たち		「～てからに」順接表現

6. 英語の影響

ハワイで暮らしているだけに英語の影響がみられるのは当然である。

例えば、ボーイという単語が出てくるが、これは「少年」一般という意味だけではなく、「息子」の意味である（「孫娘・・・一人は二人ボーイができて」）。小笠原ことばの boy も同じ意味である。年代や値段などの数字は英語になる傾向が見られるが、これも小笠原ことばと似ている点が興味深い。

また、20分程度の今回のデータでも、wife（家内）と misses（奥さん、家内）が出てくる。

日本の日本語でオーライというのは、主に車を誘導するときに使う表現であるが、嘉数氏（そして聞き手も）のデータには、①「良いよ」という返事および、②「それでは」という感じで考え込むときの間投詞の両方として使われる。

7. さいごに

新しい理論的な発展によって、またはデータの発掘によって数十年前に築かれた「ハワイ方言」の研究を進めることが可能となっている。今後、日本とハワイの研究機関の協力を通じて、オーラルヒストリーという別目的のために採集されたデータの新しい利用によって、あるいは活用されずに眠っているデータの発掘によって、新たな研究部門が切り開かれると期待される。

謝辞

本稿で使うデータの存在を知るきっかけとなった国立シンガポール大学の平本美恵氏、そしてハワイで大変お世話になった次の人々に御礼申し上げます。ハワイ沖縄連合会専務理事 Jane Fujie Serikaku, ハワイ大学沖縄センター長 Joyce Naomi Chinen, ハワイ大学日本研究センター長 Robert Huey, 同副センター長 Gay Michiko Satsuma, ハワイ大学オーラルヒストリーセンター長 Warren S. Nishimoto, 同センター研究コーディネータ Michi Kodama-Nishimoto, Japanese Cultural Center of Hawaii ディレクター Brian Niiya（順不同）。

参考文献

- 朝日祥之 2006『言語の接触と混交——サハリンにおける日本語の残存』（真田信治責任編集）三元社
- 朝日祥之 2008『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』ひつじ書房
- 朝日祥之 2010「サハリンに生まれた日本語の接触方言」『日本語学』29.6

- 足立聿宏 1990 「ピジンか標準英語か：ハワイ日系人の言語行動」『関西外語大研究論集』 51
- 安倍勇 1965 「ハワイと日本語」『言語生活』 167:81-88
- 井上史雄 1971 「ハワイ日系人の日本語と英語」『言語生活』 236:53-61
- 井上史雄 1999 「ことばの散歩道 11 ハワイの日本語」『日本語学』 18-3:43
- 小野米一 1978 「移住と言語変容」『岩波講座日本語 別巻 日本語研究の周辺』 岩波書店
- 小野米一 2001 『移住と言語変容—北海道方言の形成と変容』 溪水社
- 黒川省三 1983 「ハワイの日本語」『現代方言学の課題 社会的研究篇』 199-220, 明治書院
- 国立国語研究所編 1963 『沖縄語辞典』 大蔵省印刷局
- 酒井幸 2004 「ハワイ日系人の日本語 —可能表現を中心に—」『日本方言研究会第78回発表原稿集』 日本方言研究会
- 島田めぐみ, 本田正文 2007 「ハワイ日本語の語彙的特徴」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』 58:483-493
- 島田めぐみ, 本田正文 2008 「日本語新聞に見るハワイ日本語の特徴」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』 59:513-525
- 小学館国語辞典編集部編 1988 『日本国語大辞典』 小学館
- 比嘉正範 1974 「ハワイの日本語の社会言語学的研究」『学術月報』 26 号 11:29-35 日本学術振興会
- ロング・ダニエル (近刊) 『小笠原の英語, 日本語, 混合言語 —欧米系島民が使い分ける三つの言語体系—』 南方新社
- ロング・ダニエル, 張守祥, 張愛慶, 石坂真央, 今村圭介, 塚原佑紀, 田中節子 2010 「石垣島の台湾系島民の日本語 — 1 話者のケース・スタディー —」『日本語研究』 30:31-50
- Gordon, E. 2008. *Finding our Own Voice: New Zealand English in the Making*. Canterbury University Press.
- Gordon, E. M., Campbell, L., Hay, J., Maclagan, M., Sudbury, A., and Trudgill, P. 2004. *New Zealand English: its Origins and Evolution*. Cambridge University Press.
- Hiramoto, M. 2010. Dialect contact and change of the northern Japanese plantation immigrants in Hawai'i. *Journal of Pidgin and Creole Languages*, 25.2: 229-262.
- Inoue, Fumio 1991. *A Glossary of Hawaiian Japanese* (Second Edition; privately

published)

Long, Daniel. 2007. *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*. (Publications of the American Dialect Society 91). Duke University Press.

Sakoda, Ken & Siegel, Jeff. 2003. *Pidgin Grammar*. Honolulu: Bess Press.

Siegel, Jeff. 1988. *Language contact in a plantation environment: a sociolinguistic history of Fiji*. Cambridge: Cambridge University Press.

Trudgill, Peter 1986. *Dialects in Contact*. London: Blackwell.

Ueunten, Wesley 2008. Okinawan Identity. In *Uchinaanchu Diaspora: Memories, Continuities, and Constructions* (Social Process in Hawai'i) edited by Kiyoshi Ikeda & Joyce N. Chinen. Honolulu: University of Hawaii Press.

(あさひ・よしゆき 国立国語研究所准教授)

(Daniel Long 首都大学東京教授)